第１章　EPISODE 解説

EPISODE 1-1

● なぜ４年生で「ごんぎつね」を学ぶの？

４年１組の１時間目は国語の時間，新しい単元は，「ごんぎつね」です。いたずら好きのきつね「ごん」はいたずらをして，貧しい農夫の「兵十」のとった大事なうなぎを逃がしてしまいます。しかしそれは，兵十が病床の母に食べさせるための大事な獲物だったことを悟ったごんは，自分なりのつぐない（栗や魚を届ける）を始めます。物語の最終場面でごんは兵十に銃で撃たれて死んでしまいますが，その直後に兵十は「ごん，お前だったのか。いつも栗をくれたのは」と，ごんのつぐないに気づくという悲しい結末を迎えます。子どもたちは物語に強い印象を受けています。最後の場面についてのクラスの討論では，子どもたちからさまざまな意見が出されました。

先生「この場面で，ごんと兵十は，どんな気持ちだったでしょう？」

子どもＢ「ごんは見つかって，撃たれて悲しかった」

子どもＣ「でも，兵十につぐないの気持ちが伝わって，少しほっとしたかもしれない」

子どもＤ「兵十は，はじめは泥棒きつねだと思ったけど，ここではとんでもないことをした，って後悔している。でも，なんでこんな悲しい結末なんだろう」

EPISODE 1-2

● 場面ⓘ　自然物の認識――花や鳥など自然物を見聞きしたとき

例：５歳のＥちゃんは，登園路の道端の花を見るのが大好きです。「タンポポがニコニコしている」そんな風にお母さんに話しかけています。

● 場面ⓘⓘ　友だちとの交流――友だちと遊んだり，けんかしたりしたとき

例：10 歳のＦさんは，ささいなことで友だちと仲たがいし，怒りを感じています。でも，どちらが悪いかだけでなく，友だちとこれからどんな関係になりたいか，落ち着いて考えようとしています。

● 場面ⓘⓘⓘ　授業や学習――園や教室で，先生の指示・指導を聞いて学ぶとき

例：年長組（4, 5 歳児）のクラスは，「らいおん組のお店屋さん」と題した，工作とお店屋さんごっこをしています。みんな，先生の話を聞きながら，手元の画用紙や粘土で工作をするのが待ちきれません。

● 本章での学びを踏まえて，EPISODE 1-2 も参考に，子どもの「ものの見方」「考え方」について，次の視点で検討してみましょう。

① EPISODE 1-2 の場面ⓘ～ⓘⓘⓘを例に，それぞれの思考の特徴を考えてみましょう。

② 可能であれば，親戚や知りあいなど，身近な子どもと実際に接してみる，あるいはテレビの子ども向け番組などを視聴して，「この子はどんなことを考えて行動しているのか」という視点で，子どもを観察するなどしてみましょう。年長児（4, 5 歳児）と，小学校中学年児童（9, 10 歳）での，思考の特徴や違いについて表にまとめてみましょう。

EPISODE1-1 の解説と検討のポイント

幼児期から児童期に至るこの時期，「自分」の視点だけでなく，「他者」の視点を十分認識することができるようになります。「ごんぎつね」の作品のなかの，「ごん」や「兵十」という登場人物に，自分を投影させ，さまざまな心情や状況を考えたり，物語の構成，展開をより引いた目線，つまりメタ認知的に捉えることが可能になります。

「ごんぎつね」を小学校４年生の国語の教材として採用することのひとつの発達心理学的，教育心理学的な理由は，この時期の子どもの認知発達の段階に適した教材であるという点があげられます。第１節「子どもの思考とその発達」および Column①「思考の発達段階とカリキュラム」にあるように，学校の教科書や教材は，子どもの思考の発達段階を考慮して内容が設定されており，子どもの考える力，理解する力，創造する力をより高めるように工夫されています。「ごんぎつね」の教材は，このような子どもの認知発達とカリキュラムの関連を考える上で適したもののひとつといえるでしょう。本章の内容をもとに，小学生の各教科の代表的な単元や教材の内容が，認知発達的にどのような特徴をもっているか，考察してみることは興味深い観点です。

EPISODE1-2 の解説と検討のポイント

① ＥＰＩＳＯＤＥ１―2 の場面ⅰ～ⅲを例に，それぞれの思考の特徴を考えてみましょう。

園児（年長児 4,5 歳）と児童（小学校中学年 9 , 10 歳）との間には，思考の発達における大きな節目があります。ピアジェの認知発達理論にあるように，思考における「操作」が可能になる幼児期から児童期の発達の質的な変化は大きなものです。EPISODE1-2 では，園児（年長児）と児童（中学年児童）を取り上げ，ⅰ．自然物の認識，ⅱ．友だちとの交流，ⅲ．授業や学習　という３つの領域から，各発達段階の特徴を，現実の具体的場面を描くことで理解していただくことを想定しています。

「前操作期」と「具体的操作期」（あるいは「形式的操作期」への移行）の発達的特徴を踏まえて，実際の子どもの発話やふるまいの様子を想像しながら，３つの場面であらわれる，思考の発達の特徴を描いてみることで，現実にみる子どもの思考の育ちの機序が理解できるでしょう。

② 可能であれば，親戚や知りあいなど，身近な子どもと実際に接してみる，あるいはテレビの子ども向け番組などを視聴して，「この子はどんなことを考えて行動しているのか」という視点で，子どもを観察するなどしてみましょう。年長児（4,5 歳児）と，小学校中学年児童（9,10 歳）での，思考の特徴や違いについて表にまとめてみましょう。

以下に園児（年長児）と児童（小学校中学年児童）を比較した３つの場面での認知的特徴の様子を記載します。本章の内容や参考文献等から，さらに別の例について考えてみることも興味深いでしょう。

（回答例）

場面	**園児（年長児 4,5 歳児） ：前操作期**	**児童（小学校中学年 9,10 歳） ：具体的操作期**
ⅰ　自然物の認識	花や太陽など，自然物に命があるという考え（アニミズム的思考）	対象物そのものの客観的な認識・理解。ただし具体的な事象に依存。
ⅱ　友だちとの交流	・相手との交流を通じた共同遊び（ごっこ遊び等） ・相手の視点に立てず（自己中心性），対人葛藤も	・相手の視点を理解し，相互的な交流が可能に ・ただし，自己意識の高まりとともに，不安や他者意識による弊害も
ⅲ　授業や学習	・発声や動作を伴う活動的な学び（言葉や運動など）が中心 ・自分の名前を書いたり，ひらがなを読める ・時計をみて時刻が読める ・一斉指導は少なく，個々の興味・関心に即した活動から学ぶ	・実験や観察などで，具体的な事物を通した思考や概念理解が可能 ・一方，実験から得られる法則やルールの導出や仮説演繹的思考は困難（見出した事象に依存した理解や思考）